

4

佐倉藩の種痘の事跡

酒井 シヅ

順天堂大学医史学研究室

嘉永2年(1849)6月に蘭医 Mohnike が舶載した牛痘苗が長崎、佐賀から全国に伝搬したことは周知の通りである。佐倉藩には同年12月以前に牛痘苗がもたらされ、領民全体に種痘が実施された。この時点で藩全体に半ば強制種痘を実施した例としては珍しい。ここでは、その経過と成果を報告する。それと同時に、嘉永2年12月に佐倉藩が出した2種類の触書の内容について分析して、藩主の意図と背景について述べる。

触書によると、佐倉藩江戸藩邸に痘苗が到達すると、藩主の子女に種痘が行われ、藩主の命によって同年12月から佐倉藩子育方役所と佐倉医学所が領民町民全体を対象に種痘事業を行った。

佐倉藩主堀田正睦が牛痘接種に強い関心を持っていたが、当時、佐倉藩の客分で、佐倉に順天堂を開いていた佐藤泰然から得た可能性が高い。

泰然が牛痘接種のことを知ったのは、天保6年(1838)から同9年までの3年間、長崎留学中のことだろう。長崎から江戸に戻った泰然は、蘭学塾和田塾を江戸に開くが、ここで長崎で入手した数種類の蘭書をもとに『痘科集成』を著した。『痘科集成』に、泰然がすでに人痘接種を実施したことを記している。また、泰然の二男松本良順(1832-1907)の回想記に、良順4歳のとき父泰然から人痘接種を受けたとあり、シーボルトが伝えた牛痘接種式の種痘を我が子などに接種していた。

天保14年(1843)、泰然は江戸から佐倉に移住し、順天堂塾を開いたが、はじめ佐倉藩の客分であった。このとき G.F. Most の医事百科全書(1838年刊)から牛痘種痘編を訳した。表題は佐藤泰然訳、西淳甫校『牛痘種痘編』とある。西淳甫は佐倉藩医で、藩の医学所の蘭学の教官であった。

佐倉藩の江戸屋敷に痘苗が到着した時期は触書が出た嘉永2年(1849)12月以前となるが、この頃、江戸で明らかに痘苗を入手していたのは、佐賀藩の伊東玄朴とその仲間の蘭学者であった。この痘苗は同年11月、佐賀藩主鍋島侯出府のとき江戸にもたらされたものである。江戸藩邸で伊東玄朴によって藩主の子女に種痘が行われたが、それに立ち会った一人に大石良英がいた。大石良英は佐藤泰然と親しい交友関係にあった。泰然が大石から牛痘苗も貰った可能と考えられる。

牛痘苗を入手した時期は種痘医桑田立斎が伊東玄朴から11月18日に痘漿を得ていることから、佐倉藩の江戸藩邸にもたらされた11月か12月はじめであろう。

佐倉藩江戸表でさっそく藩主の子女が種痘をうけたが、それは誰によるものであったのだろうか。佐藤泰然は客分であるから、当時の江戸詰の医師で、蘭方医の鎭木仙庵か西淳甫だろう。西淳甫は佐藤泰然訳モスト牛痘種痘編の校訂者である。西の可能性が高い。

佐倉の江戸屋敷から痘苗が国元に運ばれた様子について、佐倉城代家老の渡辺弥一兵衛の事績に「其季女等を江戸に遣わして種痘を為さしめたり。自後種痘条例の発布ありて管内の士民種痘せざる者無きにいたりたり」とある。渡辺弥一兵衛は藩主を助けて佐倉藩の改革を行い、佐藤泰然の佐倉移住に重要な役割を果たした人物である。

痘苗が江戸表から佐倉城下へ運ばれると、領民に種痘論文の条例が出された。嘉永2年12月付けの触書は2種類あった。佐倉藩の子育方役所と佐倉医学所からであった。佐倉藩医学所の触書には医師全員に種痘法を学び、領内全域で種痘をすることを求めている。その後、大目付はたびたび領民に種痘をうけるように触れをだしている。

佐倉藩主堀田正睦が種痘を積極的に採用した背景に佐倉藩が天保の改革を行ったとき、小児の養育を重視し、間引きを禁じ、佐倉藩に子育方役所を設けたこともあった。その後、佐倉藩の人口の増加が続いた。